



運搬

生活
文化56
まいん

たつかわぶんとんとあと
立川分店跡
めがねばしあと
眼鏡橋跡



明治14年(1881)撮影 別子銅山記念館所蔵

たつかわぶんとん
立川分店は、
別子山中から新居浜浦への物
資輸送の中継基地です。

別子銅山の開坑よりも55
年前となる寛永13年(1636)
に開坑された立川銅山(西条
藩)がありました。



現在の眼鏡橋跡

元禄8年(1695)4月に別子銅山(幕府領)の大和間符と立川
銅山の大黒間符とが地中で抜き合う境界紛争が起こりました。
元禄10年、分水嶺をもつて境界とすることが幕府により
裁決され、別子側の勝訴となりました。

そして、元禄15年には、立川経由で新居浜浦へ至る輸送路
が開設され、同年8月立川渡瀬に立川中宿が設けられました。

別子銅山から石ヶ山丈を経て新居浜口屋までの中間に位置していることから、粗銅の荷下げや諸物資運搬の中継基地の
役割を果たしました。蔵を七つも持つ大規模なものでした。



下部鉄道跡から見た立川分店跡

めがねばし
眼鏡橋は、立川分店前に架けられた花崗岩造りの橋
でした。周辺には料亭などもあり、賑わいを極め、銅山へ行く人
たちはこの歓楽街を通り過ぎかねて、この眼鏡橋の上で迷い、
せつとう節の一節が生まれました。

ところが、明治32年8月28日に発生した別子大水害により眼
鏡橋は、流出してしまいました。現在は、元の位置より少し下流
側に違う形式の橋(龍川橋)が架けられています。

現在、跡地は立川自治会館や多目的広場としての市民の憩い
の場所となっています。

ところで、立川銅山は次第に経営難に陥り、寛延2年(1749)
住友家による請負稼行となり、別子銅山と経営が統一されること
となりました。

その後、慶応4年(1868)7月、これまで別子山中で製錬されてい
た粗銅を大阪へ送り精銅としていた作業から、現地製錬とするた
め、新居浜初の製錬所として明治2年(1869)立川精銅所が操業さ
れました。

しかし、明治24年には、惣開製錬所(明治21年完成)に統合され、
同時に立川分店も新居浜分店立川出張所と格下げとなりました。



明治10年代の眼鏡橋 別子銅山記念館

